高みへの序曲

安川茂雄

三笠書房

高みへの序曲

検印省略

定価 六八〇円

昭和四十六年十二月十五日第一版発行

著者 安川茂雄

発行者 竹内静江

発行所 三笠書房

東京都新宿区戸山町三五

電話東京(二〇三)七七八一(代)

〒162 振替東京二二〇九六

東京印刷 端野製本

© Shigeo Yasukawa Printed in Japan 1971.

0093—001045—8936 落丁・乱丁は取替えます。

高みへの序曲

安川茂雄

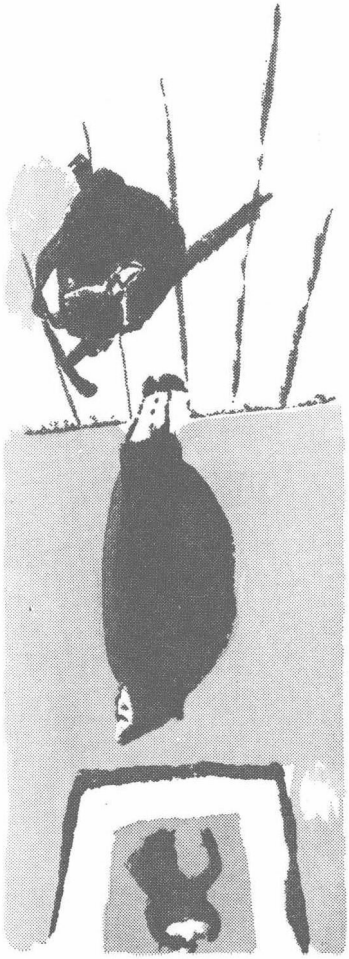
三笠書房刊

高みへの序曲

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

装幀・カット　上田哲農

第一章



十数年以前のことになるが、一度だけ岩垣志光をそれらしいモデルにして「紅い花」という三十枚足らずの小説を書いたことがあった。当時、古井俊一は或る小さな同人雑誌に加わっていたが、その同人仲間の一人が編集長をしていた『新女園』というハイティーン向きの女性雑誌の〝山と海の小説特集〟という号に、十篇近い作品中の一篇として彼は山を舞台にした短篇の執筆依頼を受けたのだった。例え短篇にせよ商業雑誌に小説を書くなど、彼には初めての体験なので、正直いっていささか興奮し戸迷った。これまで山を舞台にした小説は同人雑誌に一、二回書いたことはあったが、若い女性向きのロマンティックな内容と注文されてみると、なんとも書き辛く、あれこれと題材を探しあぐんだものだった。どうやら締切り日を二日延ばして貰いなんとか仕上げたが満足できる作品ではなかった。

「紅い花」といえば、十九世紀のロシヤ小説にガルシンの同題名の作品があった。瘋癲

病院を舞台に一人の狂人を主人公にした短篇で、古井も大学時代に文庫本で読んだ覚えがあるのだが、締切り日も過ぎてしまい他に適当な題名がどうしても浮んでこなかった。

山に憑かれた一人の若者の死と女子大生との淡い恋の結末について古井の書き上げた短篇は、ガルシンの作品とはもともとなんらの関連はないのだが、山小屋で目にしたあの一枚の版画の印象は、「赤い花」、「朱の花」ではなくて、どうしても「紅い花」でなければならない感じだったのである。

その版画は山岳画家として知られているU・A画伯の手になるもので、谷川岳山麓の山小屋で目にしたわけである。それも岩垣の死を追悼して、親しい山仲間達によって小屋に贈ったもので、日当りのあまりよくないホールの片隅の上り框にひっそりと掲げられていた。木目のあざやかな額に収められており、たしか新聞紙ほどの大きさはあったろう。濃いグリーンのチロリアンハットを目深くかぶり、頬いっぱいに髯をはやした山男の上半身が描かれており、そのいかにもむつけき山男が一輪の紅い花をそっと両の掌で捧げるかのようにして虚空に静かな眼ざしを向けている絵柄は、清楚でまこと美しかった。もともと山好きのこの作者には、〝山男〟をテーマにした版画が多く、いずれも山や自然に祈りをこめるふうな宗教画めいた素朴な陰翳がただよっていた。

その胸にひっそりとかざした花は、ほんの小さな花弁をもった一輪の花であったが、古井のみるところバラでも椿でも、あるいはどんな高山植物でもなかった。たしかガルシンの作品中の花は、瘋癲病院の庭先に咲いている真紅のケシのはずだったが、その花もなんともデモニッシュな色彩を放っており、古井には忘れがたかった。

「紅い花」を岩垣をそれらしいモデルにして書こうと意図してから古井は、生前故人と親しかった山仲間たちを訪ね、かなり精力的に取材してみた。その結果三十枚足らずの短篇を書くには、いささか材料が余りすぎるほどで大学ノート一冊にびっしりと岩垣についての資料が収集された。さらに彼は谷川岳山麓の小屋に出かけ、〝山男〟を描いたU・A画伯の作品まで検分にでかけたわけなのである。

だが彼の書きあげた短篇は、岩垣について仔細に描くところは殆どないままに終った。山に憑かれた孤独な若者と、その若者にプラトニックな愛を抱だく女子大生とのからみあいは、山での遭難という以外にはごくありふれた通俗小説のテーマにすぎなかった。作者の力倆不足といえばそれまでなのだが、そんな題材の主人公に岩垣志光を拉致してきたことが心苦しかった。例え主人公の名前は真壁太郎としてあるものの故人を冒瀆したかのように考えられて気鬱でならなかった。たしかに「紅い花」の梗概でも読んで貰うと、古井

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

の自責の念もいくらか理解できるかも知れなかった。

主人公として描いた真壁太郎は、未登の積雪期一ノ倉沢で墜死した孤独な男だった。生前に彼がプラトニックな愛をいだいた立川靖子という女子大生がいたと設定し、遭難後の数年目かの祥月命日に彼女がひとり谷川岳へ訪れ、そこで偶然、作者ともいうべき〝私〟が彼女に出逢うということが作品のロマンティックなテーマだった。生前故人といくばくかの交渉をもっており、お互い故人について追想したあと、山荘に掲げられていた紅い一輪の花を捧げた故人の肖像をしみじみと眺めるといった二十数枚の短篇にまとめたのだった。つまり早春の一ノ倉の出合で偶然に逢った女子大生にあたるべき立川靖子の存在など古井が勝手につくりあげた虚構上の人物であったし、土合の小屋で目にした山男の版画だけを手掛りとして書いたにすぎなかった。

「紅い花」をとおして、いくらか真壁太郎が岩垣志光のモデルらしい個処があるとするならば、次のくだり辺りであったろう。

――確か彼が遭難したのは一昨年の今頃ではなかったろうか――／そのとき私はふうっと一ノ倉沢南稜の積雪期初登攀をこころざして還らなかった真壁太郎の名前を想いだした。そして、彼の名前を憶うと私の心は痛むのである。彼と私との関係は友人というのでも、

先輩後輩という仲でもなかった。或る意味で厳密にいえば著者と読者の関係といえるかも知れない。しかし、ただそれだけというには余りに私の彼に対する印象はふかく濃いものが今でも残っている。或いは、こんど「無性にながめたくなった」という谷川岳行も無意識に故人への冥福を祈りたい気持がはたらいていたのかも知れない。

——四年ばかり前、私は『谷川岳の岩登り』という一冊の本を書いた。私の谷川岳を歩いた経験やら紀行やらを雑然とまとめたものであったが、私にとっては貴重な青春の収獲だった。この本を出したとき、未知の読者として初めて手紙をくれたのが真壁太郎で、彼は私の本の中の《積雪期の一ノ倉沢について》という文章にひどく感動したという一通の手紙を書いてきた。私は、「一ノ倉沢の未登攀の壁のなかで最も可能性のあるルートは、衝立岩南稜であろう」と書いたのに対して、彼は「まったく同感で、自分の考えていた意向を裏づけてくれたことが何よりも嬉しいのです。必ず南稜を登ったあかつきには報告をお送りします」と応じてくれたのだった。

——積雪期の一ノ倉沢は、それまで幾つかのルートは登られていたが、まだ衝立岩周辺の壁は登られておらず、日本の山でも未開拓な領域の一つだった。幾度か私も、この領域に光栄あるケルンを積もうと目論んでみたが、極端に悪い天候と雪崩の危険のために拒ま

れてきた。そこで私はそれらの体験から一種の机上での考察として書いたもので、どれほど実際の場合と異るのか、私には自信が持てなかった。しかし著者として、そのような読者の手紙ほど嬉しいものはなく、それから幾度かお互い手紙のやりとりをしたあげく、雑談をかわす仲になった。

そして主人公の遭難のくだりでは、

——真壁太郎が一ノ倉沢で遭難したのは、それから（作者と主人公が神田の喫茶店で山の話をした）二ヵ月ぐらいのちである。／私が帰宅して一通のガリ版刷りの彼の死亡通知を手にしたのは、木枯しの吹く深夜である。したたか私は飲んでいたが、白い葉書にならんでいる余り上手とはいえない文字の一つ一つを酔眼の底に追いながら、しだいに酔いもさめてやり切れない気持になっていた。／確かに私の著書で述べた一ノ倉沢南稜積雪期登攀の可能性を信じ込み、墜ちたのである、そう思うと、私は彼の葬儀に参列する勇気さえもおきなかった。

——私の臆測的に考察した文章に自分の情熱と光栄を信じて逝った人間——何かその死が単純なアルピニストの死ではなくて、岩壁登攀中に私自身のザイル・ワークの不始末からパーティの一人を死の奈落に追いやったふうな暗い自責のおもいにとらわれてならなか

った。

岩垣志光が一ノ倉で墜死したのは昭和三十一年三月十五日で、「紅い花」の掲載された『新女園』の発行年月日をみてみると、昭和三十二年七月十五日となっている。岩垣の没後、篤実な数人の山仲間の尽力によって、彼の追悼遺稿集がガリ版印刷の非売品『高みへの序曲』が頒布されたのが、その奥付によると昭和三十二年九月とあった。そう照応してみると、どうやら「紅い花」を書いたとき古井は追悼号を入手していなかったとみてよいだろう。

この追悼遺稿集が刊行される前、岩垣のもっとも身近かの山仲間の一人だった山代久の訪問をうけて、「岩垣について、なにか想い出の追悼文を……」という依頼をうけたのだったが、ついにその要請に応えることができずじまいだった。一ノ倉沢南稜での死に、古井は謀殺犯人に似た罪の意識に分厚く縁どられており怠けて書けなかったというよりも、追悼文を書くことによって、さらに岩垣への罪の意識をどすぐろくするのが恐かったというのが本音だった。下手に追悼文を書くことによってなにやら法廷に引きだされたあげく、目にみえない陪審員によって彼自身が裁かれるような被害妄想的な気分にかりたてられて

いたことはたしかのようだった。

できうれば岩垣の一件は忌わしい記憶として忘れたかったが、同時に秘かに哀悼したい自慰の気持もあった。古井の山との年代記のなかにあって、歳月をこえて岩垣志光との短い記憶は、目にみえないおりのように彼の胸の底ふかくに沈澱し、いつか十年近くたっていたのである。

その間に古井は十冊近い山の本を書いていた。翻訳、小説、紀行など文筆業のはしくれとして生活できるかにみえた。それもまずはヒマラヤ八千メートルの一座マナスルの初登頂に成功して以後の〝登山ブーム〟の恩恵のためかも知れなかった。だが山が彼にとって生涯の伴侶としてどれほど価値たかいものであったかどうか、考えてみると現世の幸福としてのみは甘受できない感じなのだ。山はなにやら古井にとって青春の無惨さ不毛さを象徴するかのような憂鬱な同行者にさえおもえてならなかった。

氷雪の一ノ倉で岩垣が短い生涯を果ててすでに十年近かかった。地球は年ごとに縮み込んで、世界の山々は、ヒマラヤもアルプスも、アンデスも夢の世界ではなくなっていた。古井も四十歳の声をきいてヒマラヤの一角、アフガニスタンのヒンズー・クシュ山脈へ

でかけて、はじめて氷河を踏んだのである。

彼は羽田から空路ニューデリーを経由して内陸の町カブールに到着した夕刻、ひとり王宮に面したプラタナスの繁るメインストリートを散歩しながら、やたら感傷動物に化していたのを想いだす。ヒンズー・クシュといえばヒマラヤでもせいぜい五、六千メートル峯の散在する地域で、ネパールを銀座として比較したら場末の町辻というべきかも知れない。だが、ヒマラヤはヒマラヤ——古井はやたら感動にむせんだものだった。その折に、彼の感傷をかきたてたのは、あれまでにヒマラヤを夢みて、遂に若くして日本の雪山に逝いた板倉勝宣、大島亮吉といった数多くの山の先輩たちや仲間への哀切な憶いからであった。

それから一年おきぐらいにネパール・ヒマラヤ、ヨーロッパ・アルプスへとでかける機会に恵まれて、古井は年相応にあちこちの山地を訪れたのであったが、そのたびに彼の感傷の度合は濃く深みをまして、いささか病的なまでの昂進ぶりをみせることがあった。すでに山に登るといっても四十歳をこえた体力では、若いかつての日のエネルギーにも乏しく、四肢の筋肉も関節も萎びて脆弱となり老化の現象はまぬがれがたかった。カトマンズのホテルからヒマラヤ山麓に出発した朝、冬の槍の北鎌尾根に逝いた北波稔の浅黒く精悍な風貌をふと憶ったし、アイガー山麓のグリンデルワルトから北壁を仰視しながら数日す

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c